

蕪村俳画小考（承前）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福元, 亜樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4652

蕪村俳画小考（承前）

福 元 亜 樹

はじめに

老なりし鵜飼ことしは見へぬかな 紫狐庵

すべての賛の絵をかく事、画者のこころえ有べき事也。右の句に此画はとり合す候。此画にて右の句のあはれを失ひ、むげのことにて候。か様の句には只簞などをたきすてたる光景しかるべく候。（以下略、安永三十五年）

右の文は、蕪村が乙総へ認めた書簡に見え、もとは月溪への俳画指導として月溪作の魚籠と鮎二尾の画に書き付けたものである。蕪村は、「老なりし鵜飼ことしは見へぬかな」の句に魚籠と鮎二尾を描き添えては、直接的過ぎて句の情趣が失われてしまうので、簞火を焚きすてた光景が一番妥当であろうと結論を述べている。同様に「ゆく春や同車の君のさゝめごと」の賛句に、蕪村は牛車や女性の姿では無く、牛車の後に付き従う傘持の男を描き添えている。つまり賛句は、車の中から聞こえてくる男女の睦言に微笑を浮かべながら耳を傾ける傘持の心情を表すものと趣向されているのである。従

来の俳画は、絵が句意理解の補助的役割でしか成り得なかつたのに対し、蕪村は俳諧と絵画の相互作用により、連句の付合の如く第三の世界を展開させ、彼独自の俳画様式を完成させた。こうした蕪村の俳画について、渡辺肇山は『俳画譜』に於いて「近頃蕪村一流ヲ防め、おもしろく寛候」と称賛し、また中林竹洞も『画道金剛杵』で「蕪村は俳画中の一妙手といふべし」と高い評価を与えている。本稿は、このような蕪村俳画の特質について、前号『樟蔭国文学』第三十八号）に引き続き、更に五点の俳諧自画賛に検証を加え、蕪村の創作意図を考察しようとするものである。

なお、蕪村発句の解釈・制作年次、及び種々の絵画資料等については、大旨基本的に『蕪村全集』講談社刊）を参考とした。また、本稿中に用いた挿絵は、同全集第六卷（絵画・遺墨編）から福元が模写したものである。



① 「秋の夜や」 自画賛 (33)

蕪村は、「秋の夜や古き書よむ奈良法師」の賛句を画面右端に記し、裏頭を被った墨染の法衣姿で左腰に太刀を差し、古書に読み耽る奈良法師の絵を画面中央に大きく描き添えた。句は、画面左端の

「紫狐菴主人」の署名から安永三年七月に紫狐菴にて催された兼題「秋夜」の句会の折に吟じた作品と推定されているが、正確な制作時期は定かではない。「奈良法師」は、奈良の興福寺・東大寺などの僧兵のことを言い、『七十一番職人歌合』六十八番にも紹介されている。奈良法師は、権力闘争等が発生すると春日の神木を奉じて嗷訴し、その様子は永仁四年(一二九六)の制作として知られる僧侶の驕慢を天狗に譬えて諷刺した絵巻『天狗草紙』や、『平家物語』(巻第五)に描かれている。俳諧付合語集『類船集』の「奈良法師」の項には「軍(いくさ)と見え、『平治・平家物語』に「いくさにはかつてもしらで神葉をふるかひもなきなら法師哉」と詠まれるように、奈良法師は狂暴な武力集団として人々に恐れられてきた。句は、時折荒法師として暴れ回る奈良法師達も、静かな秋の夜長には修行の僧として古書に親しんでいると言う意味である。蕪村は、この吟を制作するに当たって、芭蕉の「菊の香やならには古き仏達」(元禄七年九月十日付杉風宛書簡)の句を意識したのではなからうか。古き都である奈良より、「奈良」と「古き」が恰も付合の如く発想された芭蕉の句を彷彿とさせる句作りになっている。また画面構成の点に於いては、奈良法師の姿が画面全体に互って描かれているが、これは偉丈夫な奈良法師の姿を視覚の面から強調した結果である。しかし、本画賛の句に対する画の役割を、秋の夜に物静かに古書に読み耽る奈良法師の姿を描くことにより、過去の文芸作品で伝えられる武力集団としての武装した彼等の姿とはまた別の一面を新たに見出したことにあると解するだけでは俳意に欠ける。奈良法師の読

む古書は、法師と言う常識からすれば仏教説話や教典等の仏書の類と考えられるが、画中の彼の柔らかい表情から察すると、『源氏物語』のような恋物語でも読んでいると解すべきであろう。即ち世上荒くれ厳めしい印象を持つ奈良法師の、秋の夜長に恋物語を微笑を浮かべつつ人知れず読み耽っている姿を描いたところに蕪村の俳諧的趣向があるのではないか。蕪村の鋭い人間観察の一端やその視線の暖かさを窺い知ることが出来る作品の一つである。

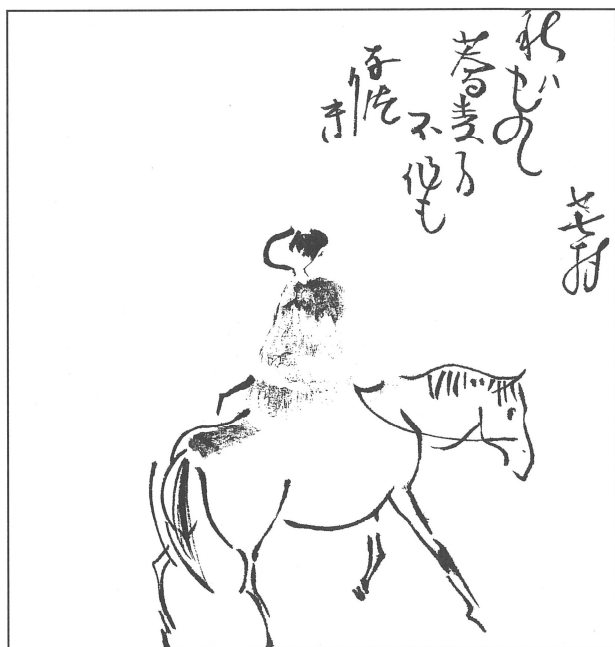


② 「又平に」 自画賛 (50)

蕪村は、赤頭巾を被って左腰に太刀を差し、小袖・袴の上に紙子羽織を着けた微酔いの男と足元に転がる瓢箪の絵を画面下部に描き、その上部に「みやこの花のちりかゝるは、光信が胡粉の剥落したるさまなれ」との前書を付し、「又平に逢ふや御室の花ざかり」の句を賛として書き添えている。句の正確な制作時期は未詳であるが、『丁酉之句帖』所収の几董句「又平が画もぬけ出て踊かな」により

安永六年の作とも推定されている(『蕪村全集』第一卷)。前書は、浮世又平が活躍する浄瑠璃『傾城反魂香』の冒頭部「白きを後と花の雪 白きを後と花の雪 野山や春を描くらん」を踏まえ、都の花の散る様子が土佐光信の絵から胡粉が剥がれ落ちるようだの意である。「光信」は、室町幕府の絵所に補せられた土佐派中興の祖土佐将監光信のことである。また発句上五文字の「又平」は、同浄瑠璃の上之巻「山科土佐将監閑居の場」の中心登場人物浮世又平を指す。又平は吃音のしがない大津絵描きであったが、その筆力により師匠光信から土佐の又平光起の名を許され、師命を受けて旅立つ時に一差し舞う。『傾城反魂香』の中でも、民衆の絵師又平の姿を吃りの芸を生かして表現したこの場面は特に優れており、歌舞伎の演目では『吃又』の名で知られている。蕪村は、その有名な主要人物である又平を題材として、俳画賛を仕立てたのである。「御室」は、京都市右京区にある仁和寺の別称で、御室の御所とも呼ばれている。境内に植えられた多数の八重桜は世に御室の桜と言われ、開花期は他所より遅い晩春で京都の花見の最後の名所とされた。蕪村は、御室の桜を題材に「眠たさの春は御室の花よりぞ(蕪村自筆句帳)の句を残している。『都名所図会』(巻之六)の御室御所の項には「かるがゆゑに弥生の花盛には、都鄙の貴賤遊客、春の錦を争ひ己が種々幕屏ひき栄え…」と記され、また『拾遺都名所図会』(巻之三)の御室花見の挿画にも、御室花見を賑やかに楽しむ当時の人々の様がよく描かれている。前書を伴って句の意味は、「都の花が舞い散る様な風景は、如何にも土佐光信の絵から胡粉が剥がれ飛んでいるよう

だ。花盛りの御室に遊び、酔い戯れる群衆の中に大津絵の絵を思わせる格好で浮かれ歩く又平に出会った。」と言うものである。又平の足元に描かれた瓢箪は、酒を呑み干した酒器であり、彼の風流振りが窺える。また、この空になった瓢箪を画中に加えることによって、又平が酒に酔って肌も露わに上機嫌で彷徨い歩く姿だとの解釈が出来、瓢箪の重要性は見落とせない。しかし、本画賛の句に対する絵の役割を花見で酒に酔った又平の姿を描き添えたのみと見るならば、俳意の乏しさを免れないであろう。同浄瑠璃「山科土佐将監閑居の場」に於いて又平は、弟弟子である修理之介が兄弟子である自分よりも早く名字名乗りを許されたことに対し、自ら名字を切望するが叶わず、その後功績を挙げて漸く光信の許可を得る。このことから蕪村は、遅咲きである御室の桜に、絵師としての才能の開花が遅咲きであった又平の面影を重ねて句作したものと思われる。また、画面構成に於いて、全体の色調を黒に抑えて又平の頭巾に鮮やかな紅を彩色する手法は、大津絵に通うところがある。即ち大津絵師である又平を大津絵の技法に従って描くことにより、又平の酒に酔って千鳥足を踏む姿はまるで戯れ絵の大津絵そのもののようにだと洒落ているのであり、その点に本画賛に於ける蕪村の俳諧的趣向があると考えたい。



③ 「秋はもの、」自画賛 (57)

蕪村は、「秋はもの、蕎麦の不作もなつかしき」の賛句を画面右上角に記し、背を向けて馬に座った旅羽織姿の男の絵を画面の中央

に描かれている。句は、安永六年九月七日付の柳女・賀瑞宛の蕪村書簡に認められており、本画賛はその後の制作と考えられる。「秋はもの、」は、「秋はものあはれ」の略で、秋と言う季節に触発されて深い静かな哀傷や悲哀などの感情が生ずることを表す古典的雅語である。『枕草子』(第一段)に「秋は夕暮。夕日花やかにさして山ざはいと近くなりたるに、鳥のねごころへ行くとして、三つ四つ二つなど、飛び行くさへあはれなり。」とあり、また、『拾遺和歌集』(巻第九雑下)に「春はただ花のひとつへにさくばかり物のあはれは秋ぞまされる」と歌われるように、和歌で秋は「もののあはれ」と言う情趣を漂わせて人の心に迫る季節である。「蕎麦」は秋の季語で、地味の瘦せた荒地でも生長し寒さに強く、収穫も早いことから救荒作物として広く栽培されてきた。その産地は全国に涉るが、信州のものが最も有名である。雅語である「もののあはれ」に「蕎麦」と言う俗語を付ける手法には、言葉遊びとしての俳諧の面白さを感じられよう。句の意味は、秋は万事にしみじみとものあわれを誘う季節、郷土の味覚を代表する蕎麦が今年是不作だと言う噂も秋の物悲しさを深める種と思えば却って慕わしいと言うものである。では何故蕪村は馬に乗る旅羽織姿の男のみを描き、全く蕎麦を連想させない構図としたのであろうか。この男は、秋になり長い間待ちに待った初蕎麦を味わうと言う目的で、信州辺りの蕎麦の名産地へ遠路遙々馬に乗ってやって来た食通なのである。ところで安永六年五月十七日付大魯宛(推定)の蕪村書簡に、「来屯・里由の両君へ御願ひ御座候。来六月四日頃京着のつもり二而焼鯛を御めぐみ被下度候。

炎暑の節二候故、外のもの八届キかね候。只焼鯛ハ風味も不損、珍重二候。」と見える。これは、保冷運搬の手段がない炎天の中でも焼鯛ならば風味を損なうことはないので、六月四日頃までに届けて欲しいと言う大魯への依頼の書簡である。蕪村は、新鮮な海産物が手に入らない洛中にいながらも、伝を求めて地方の門人に様々な食の所望をしており、他の書簡にも同様の記述が認められている。この食に対する並々ならぬ拘りは蕪村が食道楽たる所以であり、本画賛にもその嗜好の程が表れている。画中の男の様子から、これまでの道程が徒勞に終わったことを感じ取る事が出来る。足取りもとはとほと道を行く馬と、その馬に乗る男の蕎麦を食べ損なった無念さの滲み出た、如何にも哀愁漂う背中が描かれている。しかし、男は悔恨の情に耽るのではなく、寧ろものあはれを誘う種として肯定的に解しており、芭蕉の「関こゆる日は雨降て、山皆雲にかくれたり」との前書を付した「霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き」(甲子吟行)に通う詩境が感じられる。即ち本画賛の句画一体の意は、「遠路遙々、楽しみにしていた初蕎麦を求めて馬に揺られてやって来たが、今年蕎麦が不作だとのこと。これまでの道程が無駄になり、蕎麦も食べれず全く残念無念だが、これが彼のものあはれだろうか。」と言うものである。この画賛の構図は、杉風筆「芭蕉騎馬図」画賛に類似しており、蕪村もそれを意識した上で描いたと思われる。だが、芭蕉の旅の目的が伝統和歌の歌枕探訪であったのに対して、蕪村は食道楽である男の趣味人・風雅人として的一端を賛句に描き出し、その点に本画賛に於ける蕪村の俳諧的趣向があると考えたい。



④ 「雪月花」 自画賛 (66)

蕪村は、丈長で髪を結び、左腰に尻鞘付きの太刀を差した直垂姿の小柄な牛若を右に、太刀・腰刀を左腰に差して、右手に小田原提燈、左手に足駄を結び付けた薙刀を持ち、鋸・熊手・槌等の七つ道具を背中に担いで額当を巻いた鏡装束の大柄な弁慶を左に描き、画面中央右に「雪月花つゝに三世のちぎりかな」の句を賛として書き添えている。句の正確な成立年次は未詳であるが、本自画賛の制作時期は、画賛に記された「紫狐菴写」の署名から推察するに、蕪村が紫狐菴号を使用したと考えられている安永元年から六年の間であ

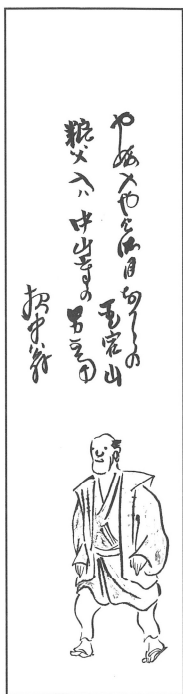
ろう。まず、本画賛に於ける句の意味を考えてみたい。「雪月花」は、白居易の詩句「雪月花時最憶君」(白氏長慶集・卷八)による表現で、雪・月・花の興趣ある三つの景物を表し、転じて四季の自然美の総称を意味する。「三世のちぎり」は、過去・現在・未来に亘つての深い主従の縁を意味しており、謡曲『橋弁慶』にも「これ又三世の機縁の始め、今より後は主従ぞと」との件が見られる。従つて句の意味は、四季の風流の遊びを共にする内に、遂に主従の約を結ぶことになつたと言ふものである。つまり『古今和歌集』(仮名序)に「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり」と見え、和歌はもののふの猛き心をも慰めるものであり、風流心が二人を結び付けたと解することが出来る。また、牛若と弁慶の主従関係に準えて、几童が俳諧を解する熊三を下僕に得たことを賀したものとも考えられている。

次に画面に描かれた装束等を検証してみたい。牛若の太刀に着けられた尻鞘は、本来は雨露などの湿気による太刀の鞘の錆を防止する為に作られた毛皮の袋で、威儀として公卿や賀茂・石清水の臨時の祭りの舞人も野剣に着けて用いており、牛若の品位が窺える。弁慶の持つ薙刀の先に括り付けられた足駄は、牛若の履物であろう。万治二年版本の『義経記』(巻第三)の挿絵には、太刀に尻鞘を着けて足駄を履いた牛若の姿が描かれている。山岳信仰の行者や天狗は、修行の為に足駄を履いたと言われており、謡曲『鞍馬天狗』に鞍馬山の天狗が牛若に兵法の奥義を授けたことから、牛若も足

駄を履いたと思われる。弁慶が牛若の足駄の世話をしているのは、木下藤吉郎（豊臣秀吉）と織田信長の話で有名な草履取と言う主人の履物を預かる下僕としての意味合いが感じられよう。弁慶の鎧の弦走に描かれた赤色の輪宝は、巨大な車輪形をした古代インド人の想像上の武器で、王の外出時の身辺警護に絶大な威力を發揮したとされている。これが転じて仏教法具の一つとなって、仏教と共に我が国に伝わり、その文様は寺院関係に於いて盛んに用いられた。輪宝が弁慶の鎧の弦走に描かれていることで、弁慶が幼少時に比叡山の西塔桜本僧正の許で勉強に励んでいたと言われる説話が思い出され、また牛若に刃向かう者はこの弁慶が皆打ち払って見せようと言った威勢の強さをも感じ取れよう。弁慶が右手に持つ小田原提燈とは、折り畳みの出来る円筒状の小型提燈で、享保年間に相州小田原の甚左衛門が考案して売り出したのが始めと言われる。この提燈は、夜中に点して持ち歩けば狐狸妖怪を避けるのに効験があると言う触れ込みで東海道を行き交う旅人の間に土産品として売られ、諸国に広まった。また、提燈を持ち歩いていると言うことは夜の景である。俗説とされているが、室町時代に成立した御伽草子『橋弁慶』や謡曲『橋弁慶』に見える五条の橋での牛若と弁慶との対決は何れも夜に行なわれており、蕪村はこの筋書きを念頭に置いて弁慶に提燈を持たせたのであろう。

さて、句画の關係について考察したい。「雪月花…」の句が、牛若の頭上すぐに記されていることには意味があるように思われる。つまり、三世のちぎりを結ぶことになった牛若の役割がその書式に

示されているのではなからうか。即ち本画賛の意図するところは、牛若が武術によって弁慶を従えたのではなく、「雪月花」風雅の教えによって三世のちぎりを結ぶことになったと解すべきであろう。『義経記（巻第三）』では「彼奴が持ちたる太刀、長刀打ち落として、薄手負はせて生捕りにして、独り歩くは徒然なるに、相伝にして召使はばや」と見え、弁慶を従えたのは武術によると言うのだが、蕪村の意図はそうではないであろう。しかも句中の「つゐに」と言う表現には、「このような武骨者にも雪月花の風流を教えることによつて、遂に自分の家来として成し得たのだ。」との牛若の思いがより一層強く込められているかのようなのである。ともかく本画賛の句に対する絵の役割は、「三世のちぎり」に主従關係の代表的な題材である牛若・弁慶を単に描き添えたと言うのではないと思う。ゆつたりとした足取りで道を行く尻鞆の装いの伊達な牛若と、その後に従う容貌魁偉な弁慶の姿は如何にも可笑しい。鎧を身に着けた不格好な丈高き男が風流心で牛若に従う様が可笑しく、その可笑しさにこそ、蕪村の意図した俳諧的趣向があると解したい。



⑤ 「やぶ入や」 糧父入は」 自画賛 (79)

蕪村は、藍色の小袖の上に横縞模様羽織を着て、帯に扇を差し、白色の股引に草鞋を履いた男の絵を画面下部に描いて、その上部に「やぶ入やよそ目ながらの愛宕山」糧父入は中山寺の男かな」の二句を賛として書き添えている。「やぶ入や」の句は、安永七年十二月二十七日付雨遠・玄冲宛の蕪村書簡に報じられており、その時の吟と考えられる。同書簡内には「春興」との前書が添えられ、翌年（安永八年）の春興帖に載せる春興吟として詠まれた句であると理解出来る。また「糧父入は」の句は、本画賛への採録状況から推察するに、前句とはほぼ同時期に制作されたものであろう。「やぶ入」糧父入」とは、正月と七月の十六日に休暇を得た奉公人が実家に帰宅して両親に会ったり、先祖の墓に詣でたりする行事である。蕪村は「やぶ入」を題材にした句を数多く残しており、『春風馬堤曲』第一首「やぶ入りや浪花を出でて長柄川」を始め、その何れにも帰途を急ぐ子供の姿や迎える母親の温かな愛情、久し振りの親子団欒の一時などを巧みに描いている。「愛宕山」は、山城国葛野郡

（京都市右京区）北西隅に位置する山で、山上には火災除けの愛宕権現や武家の軍陣を守る勝軍地藏が祭られており、早くから京都を始めとして各地の人々の信仰を集めた。「伊勢へ七度熊野へ三度愛宕様へは月参り」の諺があるように、毎月二十四日の縁日に愛宕権現へ参詣することを愛宕詣と呼んだ。「中山寺」は、摂津国川辺郡（兵庫県宝塚市）中山にある真言宗中山寺派の大本山である紫雲山中山寺のこと、西国巡礼三十三所の二十四番札所としても名高い。「やぶ入や」の句は、京都の北西に聳える愛宕山の姿を余所目に見ながら、足取り軽く故郷へ急ぐ藪入り男の姿を詠んだものである。「糧父入は」の句の意味は、いそいそと家郷へ急ぐ藪入りの姿は中山寺の寺男であると言うものである。『摂津名所図会』巻之六の中山寺の挿絵には、全体に境内の建築物の様子が細かく描かれており、その後方には愛宕山が聳え立っている。つまり、賛の二句は一体と成って、藪入りの為に奉公先である中山寺から愛宕山に目をやりつつ、実家へ向かう寺男の道程を表しているのである。また、第三者的な視点を以て、藪入りの男の愛宕山を余所見する様子を捉え、実は中山寺の寺男であると気付いたことを示している。寺男が愛宕山を余所見したのは、以前に愛宕詣に行った時のことを思い出し、もう一度お参りして帰ろうかなどと思案していたとも考えられる。もし、本画賛の句に対する絵の役割を、実家へ向かう寺男の姿を描き添えただけと見るならば、画は単に句意を補う為のものに過ぎない。即ち本画賛の句画一体の意は、「京都の北西に聳え、愛宕参りで賑わう愛宕山を余所目に見て、自分も参詣したい気持ち

を抑えつつ親元へ急ぐ藪入り男の姿があることだ。おや、よく見ればあれは何時か札所参りで見掛けた中山寺の寺男じゃないか。あの時は大寺の威厳を背に如何にも気難しい顔をしていたっけ、しかし今の嬉しそうな顔と言ったらどうだい。藪入りを喜ぶのは、子供や若い娘さんだけじゃねえんだねえ。」と言うものである。寺男の偉丈夫とも言える体格や、髭跡の残る長い顎に凡そ似つかわしくない無邪気な表情と、藪入りに浮き浮きと家路を急ぐ姿を描いたところに燕村の俳諧的狙いがある。また画面に寺男のみを描いて、愛宕山を見る者の想像に委ねる手法も燕村一流の趣向と言えよう。

